

木幡の幡祭り

東和町

木幡の幡祭りは、日本三大幡祭りの一つといわれ、九百余年の歴史と伝統をもつお祭りです。白旗を先達に、赤、青、黄、緑と、色とりどりの五反旗、百数十本が勢揃いし、法螺貝を吹き鳴らしつつ木幡山の尾根を縦走します。

この祭りの由来は、前九年の役の天喜三年（一〇五五）にまで遡ります。後冷泉天皇の命を受け、陸奥征伐に向いた源頼義とその子八幡太郎義家（源義家）の率いる軍勢は、安達の川崎辺りでの戦いで、安倍貞任、宗任兄弟に敗れ、わずか数騎で阿武隈川を越えて逃れてきました。その当時は「外木幡」といったそうですが、今は「御所平」という所にある農家まで逃げて来て一夜の宿をとったのでした。すると、その夜、天女が夢枕に現れ、

「ここから東方一里ばかりにある弁財天宮で祈願しなさい。そうすれば願いが叶うであろう。」と、お告げになりました。

源頼義、八幡太郎義家父子らは、さっそく、昔「いさずめ」と言っていた今の木幡山へ馳せ参じ、神社で戦勝を祈願しました。一方、安倍頼時は、その子安倍貞任、宗任兄弟を従え、伊達の信夫に陣を構えたのでした。そしてその軍勢が追いかけて来たといえます。今の「針道」とのころから、「下馬」という所まで来たのだそうです。

その夜は、旧暦の十一月十八日のことといえますから、木幡山の杉は北の方に枝がなくて、南の方にばかり枝が付いていたのですが、それにどつさりと雪が降り積りました。安倍兄弟は、敵を皆殺しにしてくれようと思って、勇んで攻めてきたのですが、下馬の所へきて見ると、源氏の白旗で山がいつぱいになり、軍勢が大勢いるかのように見